

小池 正博  
西田 青沙  
森川 敬三

共選

## 特選

半歌仙『頓て死ぬ』の巻 徳島県 徳島県連句協会

梅村 光明 捌

頓て死ぬけしきは見えず蟬の声 芭蕉翁

開き切つたる古池の蓮 西條 裕子

愛くるしマトリョーシカを手遊びに 梅村 光明

チーズフォンデュの卓の賑はひ 二橋 満璃

もの想ひひとり耽ければ傾く月 裕子

烽火代はりの秋刀魚焼く煙 光明

牧閉ざす馬柵遠くまでなだらかに 満璃

逢へぬ日続き募るいとしさ 裕子

女子会のすぐ盛上がる恋懺悔 光明

ぐうたら亭主まづは槍玉 満璃

議員席スマホ居眠りここかしこ 裕子

熱きおでんのコント大受け 光明

月翳り名物和尚しはぶかん 満璃

酒場へ降りる螺旋階段 裕子

やり投げの記録を伸ばし初メダル 光明

海の青さに染まる麗らか 満璃

補陀落を花の都にふと重ね 光明

スカイツリーを包む淡雪 裕子

令和四年七月二十四日 満尾 渭東コミセン

入選

半歌仙『梅に出て』の巻

神奈川県 蛙門会

横田 めい 捌

梅に出て初瀬や芳野は花の時

芭蕉翁

蝶舞ひおりの古き石堀

浅岡 照夫

あたたけし画面の友と語らひて

岡部 瑞枝

ちよこつと正座啜る枡酒

村松 定史

ミステリートレインに乗る十七夜

篠塚 雅世

隧道の先コスモスふはり

光丘 真理

静けさの降り積りたる霧の街

照夫

タイルの歪み触りたくなる

真理

愛なんてこんな小さな帆掛船

定史

貴女の笑顔マツチ擦つたら

瑞枝

もう嫌よ京風出汁の冷麦は

横田 めい

山行くものと海行くものと

竹林舎青玉

病み上り吾子のまなこに冬の月

真理

雪の吊橋鬼の待つ里

照夫

藁一荷馬に咀嚼を促して

定史

水汲む井戸に風こそばゆし

瑞枝

鉄柵を越えてミモザのあふれをり

めい

若鮎を煮る遅き夕餉に

雅世

令和四年五月十七日 満尾 東京文化会館

入選

半歌仙『空で雨降る』の巻

東京都 都心連句会

柳田 萌 捌

八九間空で雨降る柳かな

芭蕉翁

いと長閑らかにけぶる濠端

柳田 萌

春スキー旅行会社に予約して

功刀 太郎

試し履きする新調の靴

秋山よう子

高層の玻璃にくつきり望の月

松本 華与

駅の往来ひやひやとする

太

角打のこの濁酒たまらなく

萌

税務署員が給付金詐欺

与

背の君は東大卒のイケメンで

う

料理の技を仕込む戦術

萌

雲行きを察し二階へ逃げる猫

太

月にマントを翻す魔女

う

真夜中もアニメ工房忙しく

与

年玉握り限らない夢

太

恩愛の母懐しき子守歌

萌

朝の読経に遅参する僧

与

三春なる花はなだれて地に触れて

う

山里行けば雉の保呂うち

太

令和四年六月九日 満尾 遠隔会議システム

入選

半歌仙『こちら向け』の巻

長野県 河童連句会

矢崎 硯水 捌

こちら向け我もさびしき秋の暮

芭蕉翁

君が絵に添へ月読の賛

矢崎 硯水

捨案山子ひとりぼつちを囃されて

佐野典比古

隣の町の犬の遠吠え

硯水

鞆から緑酒の瓶を取り出しぬ

典比古

何はさておき浸る温泉

同

着ぶくれて藪井竹庵蚤の市

硯水

雪女郎にも似たる人形

同

唇の熱き触れ合ひよみがへり

典比古

仮面舞踏はいよいよ佳境に

同

カリブ海噂しきりのパイレーツ

硯水

肩に鸚鵡をのせて肌脱ぎ

同

安住の島のくらしに月涼し

典比古

釣竿撓ひヒット次々

同

コロナ禍も笑ひ絶やさぬ恵比寿様

硯水

金平糖をこぼす嬰ゐて

典比古

五十鈴川堤のさくら花盛り

硯水

旅愁しみじみ麗日の候

執筆

令和四年七月三日 満尾 文音

入選

半歌仙『景清も』の巻

岐阜県 桃雅会

中森美保子 捌

景清も花見の座には七兵衛

芭蕉翁

見渡すかぎり爛漫の春

中森美保子

猫の仔を膝に縦笛奏であて

宮川 尚子

ちよつと休憩乾くパレット

波多野茂子

読み耽る本を閉ぢれば高き月

中西 静子

貨物列車は櫓田をゆく

尚

弁当は冷えても旨い零余子飯

全

美酒携へて久闊の友

静

ティファニーのオープンハートポケットに

茂

いちづに思ふ初めての恋

保

御柱祭飛び出す木遣り衆

尚

代々守る紺屋藍瓶

静

月冴ゆる終バスを待つ顔なじみ

茂

サッカーくじを買つてみたけど

尚

直観と偶然の間に揺れてゐる

静

眠気を誘ふ長い説教

茂

幾重にも山吹の黄の晴れ晴れと

尚

散歩楽しむ囀りの中

静

令和四年五月二十五日 満尾 名古屋市芸創センター

入選

半歌仙『曙は』の巻

徳島県 花音連句会

三輪 和 捌

曙はまだ紫にほととぎす

芭蕉翁

和紙に涼しき水茎の跡

三輪 和

名香と伝はる品を薫きしめて

東條 士郎

友と歓談心やはらぐ

佐藤 清幸

月中天海は鏡のごとしづか

二橋 満璃

野山の錦風に囁き

都築ひな子

禁酒の身そぞろに寒き旅の宿

和

湯舟に浸す肌の愛しく

士郎

赤ん坊あやす夫に惚れ直し

清幸

微笑み湛へ大悲観音

満璃

戦争のなき世界をと祈り込め

ひな子

冬季五輪の旗手をつとめる

和

スケートの描く曲線月明り

士郎

エンゲル係数跳ね上がる日々

清幸

一汁と何はともあれ一菜で

満璃

ふるさとは今土匂ふころ

ひな子

夜勤あけナースも暫し花人に

和

胡蝶の夢を誘ふ微睡

令和四年七月六日 満尾 渭東公民館く文音

入選

半歌仙『梢より』の巻

滋賀県

谷澤 節 捌

梢よりあだに落ちけり蟬の殻

芭蕉翁

大暑の風の抜ける街道

谷澤 節

管楽器ロングトーンをひたすらに

上野 知子

砂の時計はさらさらと降る

角谷美恵子

柔らかな産着を畳む初月夜

岡谷 樹

笑顔につられ赤い羽根買ふ

井内 温雄

新藁の草鞋仁王に奉納し

節

人生相談ワイドショーにて

知

失恋のお薬手帳もつてます

美

しなだれたいの厚い胸板

樹

荒波の千畳敷の岩陰に

温

青木繁は旅を夢みる

節

凍空の月を仰ぎて父偲ぶ

知

地盤引き継ぎトップ当選

美

伝説のパティシエが生むモンブラン

樹

山羊の乳酒の香うららか

節

見はるかす背割堤の花明り

温

自転車止めて遊ぶ弥生野

知

令和四年七月十五日 満尾 文音

入選

半歌仙『春なれや』の巻

愛知県 ン会

井上 雫 捌

春なれや名もなき山の薄霞

芭蕉翁

隊列高く帰りゆく雁

津田 みき

泥つけて野遊びの子ら玄関に

佐々木わかこ

ひとり残れる此の秘密基地

松末不來方

月光の洞の内までかうかうと

安藤 さえ

水琴窟の音のさやけし

井上 雫

いろは坂いろはにはほへど照紅葉

不

耀歌に踊る我と汝と

不

惜しみつつ小高き丘に領巾を振る

さ

遠のくヨット白き砂浜

み

絵日記を綴ちて終はりぬ夏休み

わ

担任教師ふいに出家し

不

糸杉に寒三日月のかかりたる

わ

海鼠腸酒は五臓六腑へ

雫

しみじみとゼレンスキーの髯のこと

不

祖国を去りて民のさまよふ

わ

磐座へ続く道あり花の雲

み

若駒の踏む草のやはらか

さ

令和四年四月十三日 満尾 本山セイゼリア



入選

半歌仙『瓜むかん』の巻

山梨県 都心連句会

功刀 太郎 捌

子ども等よ昼克咲キぬ瓜むかん

芭蕉翁

アニメ浴衣は糊のぱりぱり

功刀 太郎

野良猫を飼へば鈴など付けもして

秋山よう子

SNSにいいね殺到

松本 華与

初めての望遠鏡で月の蝕

柳田 萌

簾納めて陽の届く部屋

う

山峡は葡萄紅葉の珍しく

太

幼なじみを軽トラに乗せ

萌

イケメンの歯医者にあんと口を開け

与

俯いて聞く義理の祝電

太

遺伝子の操作に神はご立腹

う

納豆売の声消えた町

萌

窓の月熱爛一本手酌にて

与

寺の大杉もの凄き影

う

人絶しところ怪魚の深き淵

太

今日万愚節爺を騙さん

与

傘閉ぢて濡るるも嬉し花の雨

よ

磨硝子より洩れる春灯

萌

令和四年六月十六日 満尾 リモート会議システム

入選

半歌仙『穂麦』の巻

山梨県 都心連句会

功刀 太郎 捌

いざともに穂麦喰はん草枕

芭蕉翁

左手はるか夏めきし海

功刀 太郎

香よき泰西画集開き見て

柳田 萌

じやれつく猫をそつと押しやる

松本 華与

待宵の縁にはらから集ひをり

秋山よう子

木の実時雨のしきり大屋根

萌

村芝居趣向を変へてハムレット

太

尼となりたる女たをやか

う

君がため閉めずに置いた裏の木戸

与

餌をあさりに群雀くる

太

爺様の革の手提げの蓄音機

萌

演奏済んで爛酒の月

与

風邪引て探す富山の置薬

う

八百八町みんなすこやか

萌

講中の先達どこか誇らしく

太

払つてもなほ纏ひつく虻

う

吊り橋の行手をふさぐ花吹雪

萌

ふはりと軽き春のスカート

与

令和四年五月十二日 満尾 遠隔会議システム

入選

半歌仙『京にても』の巻

京都府 あしべ

三原 寿典 捌

京にても京なつかしやほととぎす

芭蕉翁

木漏れ日清き川床の宴

三原 寿典

手塩皿登り窯から今出さむ

増田 敏

風呂に浸かれば緊張の溶け

寿典

紺碧の稜線に乗る望の月

敏

豊作祝ひ満悦の笑み

寿典

鎮守社へ参る小紋の秋袷

敏

ウイキペディアへ寄付をチャリンと

寿典

美を武器にクレオパトラは国治め

寿典

添ひ寝の妻の乳房やはらか

敏

やきもちの店は大きな幟立て

寿典

駅の暖炉に集ふ旅人

敏

雪やみて葵き月光ふりそそぎ

寿典

静寂を裂く犬の遠吠え

敏

明日からは空港もまた忙しく

寿典

街に飛び交ふ言語さまざま

敏

満開の花天蓋に六地藏

寿典

朝の麗らか香る珈琲

敏

令和四年六月十四日 満尾 メールにて文音

入選

半歌仙『城跡や』の巻

東京都 夢々連句

静 寿美子 捌

城跡や古井の清水まづ訪はん

芭蕉翁

さやけき風に白き鳶尾

静 寿美子

一列に並びし子等の賑やかに

橋本やす子

皆んなが主役島の分校

後藤とみ子

月照らすベンチに残る文庫本

北畠 明子

葛の葉揺らし通りゆく猫

佐藤 澄江

夷切吉祥柄をみつげだし

三輪 慶子

今度の上司男振り良く

永塚 尚代

妄想も空想もよぶ秘めし恋

柳田 宏子

メタバースには美女のAvatar

や

ポケットに金比羅さんの守り札

澄

投票場で手指消毒

明

酒好きも下戸も多弁に年忘

と

眠る寒鷹月に影置く

慶

Aレクサに懐かしの曲リクエスト

寿

散歩コースは足の向くまま

宏

天蓋となりて大樹の花盛り

尚

峠の茶屋の菜飯名物

や

令和四年七月十六日 満尾 文音

入選

半歌仙『狂句こがらし』の巻

岡山県 昂連句会

大倉 青帆 捌

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉

芭蕉翁

万両の実は赤くひそかに

石見にやん子

何もかも値上げ値上げで策もなし

今村 華紅

からりと揚がるポテトコロツケ

大倉 青帆

気に入りの志野の茶碗に月の影

杉原 有丈

数珠掛鳩が夢を見るころ

帆

子供らの声の騒いでハロウイーン

子 紅

酒屋の角で君を待ち伏せ

紅 子

抱き寄せて髪のにほひの懐しく

子 帆

帰りの時間ばかり刻々

帆 紅

さまざまな野菜果物道の駅

紅 丈

手なづけてゐる父のハーレー

丈 紅

夏月に狼気分のポチ吠える

紅 子

郵便配達回数が減り

子 丈

古書店を廻り俳諧集あさる

丈 子

龍角散の効き目確かに

子 紅

床の間に一枝飾る花の宿

紅 帆

鯨曇りの浜の潮騒

帆

令和四年七月一日 満尾 きらめきプラザ

入選

半歌仙『馬ぼくぼく』の巻

滋賀県

谷澤 節 捌

馬ぼくぼく我を絵に見る夏野かな

芭蕉翁

息吹き返す振舞ひの水

谷澤 節

笛の音の何方よりか流れきて

松本奈里子

青磁の香炉競売に出す

増田 敏

望の月千の棚田に写り込み

金城比呂子

けふの夜長に読み終へし本

米倉 洋子

鬼の栖む大江の山のましら酒

井内 温雄

スプーンぐにやりと曲げるトリツク

林 典子

戦場の映像送る茶の間へと

もりともこ

歴史の闇に眠る言霊

里

ヘルメスの秘薬も効かぬ病ある

敏

ケセラセラなりパリジャンの恋

洋

焼芋を分けあひ二人熱くなり

洋

ラガースクラム応援の月

と

駆け抜けた昭和平成なつかしみ

里

お遍路さんに挨拶の子ら

温

花大樹ライトアップに七変化

敏

緑茶と共に草餅を食ふ

比

令和四年七月九日 満尾 文音

入選

半歌仙『うかりひよん』の巻 鹿児島県 鹿児島県連句協会

松下みゆき 捌

夕顔に見とるるや身もうかりひよん 芭蕉翁

山家の宵にすする水飯 松下みゆき

旅立ちの支度に心弾ませて 前田 豊

操り糸の手業あざやか 吉永千賀子

観覧車月の匂ひをオプシヨンに 梅村 光明

運動会はカメラ列成し 豊

秋収め大活躍の収穫機 みゆき

ほろ酔ひ語る夢の企み 光明

粧へどふと躊躇ひて紅落とす 千賀子

五十路の恋は隠し通さん みゆき

月冴ゆる帽子深々急ぎ足 豊

氏神迎へ夜神楽を舞ふ 千賀子

豆腐屋の日々の想ひを歌に詠み 光明

気分爽快朝のジョギング 豊

謎めいたヨガの先生猫ぎらひ みゆき

魔女の箒の掃ふ春泥 光明

鄙ならば花の扉は開かれて 千賀子

紙風船をそよ風が撫づ みゆき

令和四年七月二十五日 満尾 文音

入選

半歌仙『六月や』の巻

徳島県 花音連句会

関 真由子 捌

六月や峯に雲おく嵐山

芭蕉翁

若竹匂ふ木漏れ日の道

関 真由子

ピアノストホールに靴の音立てて

西條 裕子

しなやかに添ふ絹のブラウス

真由子

水精の淡く差し込むわが心

裕子

いつの間にやら部屋にすいつちよ

真由子

後の雛そつと薄目を開けたまふ

裕子

ちんぷんかんぷん英字新聞

真由子

巧妙な手口で落とす優男

裕子

夫無職で妻はエリート

真由子

フィンランド首相ジェンダー論を説き

裕子

鯨の跳ねる月の洋上

真由子

絵本抱く幼の笑顔降誕祭

真由子

平和のために父は兵士に

裕子

国境を越えて鉄路の黒々と

真由子

画架に画筆に泡雪の触れ

裕子

行脚僧しばし憩へる花大樹

真由子

雉の眸は人を恐れず

裕子

令和四年七月九日 満尾 文学書道館&文音